

編集後記

紫陽花の淡き濃き花びら一枚一枚が、調和をなしながらふくよかな一輪の花を形作り、日毎にその色合を変えていく季節を迎えました。

さて四月以来、編集の過程で会員の方々の関心を集めました『愛知大学文学子論叢』第一〇三輯をお届け致します。今回は一九篇にもおよぶ投稿があり、そのすべてを掲載するか否かをめぐって、編集委員会でも活発な議論が行なわれました。体裁と内容を新しくするのか伝統を守るのかによって、当然編集の方法も異なってきました。議論はもっぱらそこに集中しましたが、今回は従来通りとし、題目が表紙一ページにおさまる範囲の論文数に止めること、またエッセイや随筆ではなく研究論文に限ることに決定しました。特に原稿締切の期日に間に合った論文を優先したところ、第一〇三輯には二二篇の論文を掲載し、残る七篇は次号送りとなったわけです。

ところで古代から日本人は、色あざやかな大輪の花よりも、可憐な草木や草花を賞美しようです。万葉集において藤原時代以前には、個別の花を詠む作品はほとんどありませんが、奈良時代になると、梅・山桜・萩や菫・葛・などしこ等が盛んに詠まはれはじめます。その背後には、中国の詩賦や庭園文化の影

響があるのでしよう。が、ともかくこの時代に日本人の花に対する関心が高まり、歌人達はその形象化に力を注ぎました。

。言問はぬ木すら紫陽花諸茅等が練の村戸に欺かえけり

。紫陽花の八重咲く如く八つ代にをいませわが背子見つづ偲はむ(七七三、四四四八番歌)

前者は、坂上大嬢の心変わりをなじる大伴家持の一首で、後者は橘諸兄の宴席での作です。紫陽花は、白から碧、紫さらに淡紅へと色が変わるため、そのイメージは人の心の移ろいに重ねられました。一方、幾重にも咲きほころぶ花の様子は、人生の弥栄の具象化に効果的でした。

一〇三輯も、あるいは右の紫陽花の歌に似ているのではないでしょうか。「欺かえけり」に近い感慨を抱かれる方、また本学創立五〇周年を目前に控えて、論輯も「八重咲く如く」発展してきたことを実感される方も少なくないはずです。文学会の伝統を守りながら、かつ時代と会員のニーズにこたえるべく、近い将来「文学論叢」を刷新する必要があるのかもしれない。古代日本人が紫陽花に思いを託したように、本誌が時代の学問をリードする創造的な論輯としてより充実し発展することを祈願して……。

(れいか&傘)